

## 第2回徳島東部地域定住自立圏共生ビジョン懇談会 会議録

と き 平成23年8月9日（火）午後2時から午後4時

ところ ホテル千秋閣（7階 鳳の間）

### 1 開会

### 2 議事

(1) 共生ビジョン(案)に係るパブリックコメント手続の実施状況について

(事務局) **資料1** 共生ビジョン(案)に係るパブリックコメント手続の実施状況 に基づき説明

(2) 徳島東部地域定住自立圏共生ビジョン(案)について

(事務局) **資料2** 第1回徳島東部地域定住自立圏共生ビジョン懇談会での意見 に基づき説明

(委員) 今回、皆さんからご意見いただきたい点としては、「共生ビジョン（案）」について、前回、ご意見をいただけていない部分についての意見。2番目は、今回の共生ビジョンの重点分野である「観光・産業振興」、「人材育成」、「協働」、「中心市街地の活性化」などについて、今後、圏域市町村や民間事業者、NPOなどの多様な主体が連携・協力して実施すべきものとして考えられること、主に、この2点について、また、それ以外の部分に関しましても、ご意見をお願いします。

(委員) 地域資源や企業等の技術を活用した産業育成についてですが、地域内にはいろいろな技術を持った企業がたくさんあり、それぞれで産学連携などの機会がありますが、横のつながりがもうひとつ見えないところがありまして、もっとビジネスマッチングが盛んに行われるような仕組みが必要なのではないかと常々思っております。

特に、どの地域とどの地域が一緒になってということは産業集積は難しいですが、徳島市内で昔から地場産業と言われる木工業などは、今、木工会館を中心にいろいろな動きがありますが、その動きを東部地域でさらに活発化させ、阿波藍とのコラボといった伝統産業との連携など、木工だけではなく間口の広いリンクを張って、横につながっていく仕掛けも必要なのではないかと思っております。東部地域の広域的な活動として行うことが、必要だと感じております。

(委員) 横のつながりやビジネスマッチングは、非常に大切だと思います。木工業は過去10年で企業数、就業者数、製造品の出荷額、この主要な3項目が4割くらい減っており、非常に弱っているというのが実情です。ニュービジネスの育成や企業誘致も大切ですが、既存の地場産業の振興も非常に重要ではないだろうかと思っております。

それから、地域資源や企業等の技術活用ということですが、コミュニティビジネスには2つポイントがありまして、1つ目は、地域資源の活用、2つ目が地域における課題の解決で、上勝町の「葉っぱビジネス」は、まさにこれらの点をクリアしていると思っております。コミュニ

ティビジネスは、最近盛り上がりには欠けていますが、こういったことは地場産業の振興に非常に重要な視点ではないかと思うところがございます。

先ほども出ました「横のつながり」は非常に難しいけれども、重要ではないかと思えます。

また、ビジネスのマッチングにおいて、最近、地域の銀行がこの分野で大変活躍されているという実感がいたします。地場産業の売込みや企業誘致における情報提供など、こういったことに力を発揮しているということは、非常に嬉しいことだと思います。

(委員) 今、これだけの数の市町村の方が集まっています、その市町村が何に力を入れているのかがしっかりと見えてこない、なかなか横の連携もできないのではないかと思います。

まずは、市町村の方々が、今後、何に力を入れてやっていくのかをまず整理して、それを横の連携でつないでいくというような段階的なものを踏まえて、今後の活動に生かしていくことが必要ではないかと思えます。

(委員) 私の住んでいる石井町は、農業耕作地が町の面積の半分ぐらいあり、農作物の種類も多く、野菜類に恵まれています。その特色を生かして、全国に先駆けて始めた生産者が持ち寄る直売市場「百姓一」などの農産物直売所が5カ所できて、徳島市内や町外から多くの人々が来られ、農業の活性化になっています。

一方、農業後継者不足などの影響もあり、休耕地も目立つようになりました。休耕地を農業法人や商工業法人に無償で貸し出すなどすれば、農商工連携事業をより活性化できるのではないかと考えます。

私の関係している商工会でも、駐車場が広く、品数の豊富な大型・中型店が10数件もでき、コンビニも7カ所あり、そして小規模店の廃業が毎年増えています。

また、ささやかな振興策ですが、年末を控え、商工会でも商工業者の活性化につながるように、「抽選券付き売り出し事業」を町の支援を受けて実施する予定です。抜本的な産業振興策は、市町村レベルでの取組が必要であると考えます。

(委員) 6次産業ということを農水省が盛んに言っておりまして、1次産業足す2次産業足す3次産業で6次産業だということですが、農家で企業的な経営をすることは今の状況ではまだ馴染まないところがあって、そういう部分を食品産業として、企業と連携できないかということを考えています。私の組合では専業農家が多いので、そういう見方をしています。

「葉っぱ」のような地域資源はないですが、レンコンの節であるとか、農業には未利用の資源がまだあるので、県も力を入れていただいて、活用していない資源を新しい産業、商品にするということを考えております。この間、レンコンの花は有用な色素が多いのですが、その利用について、この東部地域の事業者ではないですが、一緒に研究をやっていこうということを話しました。

(委員) 例えば、作物が獲れすぎた時には、タネ代にもならない時がありますから、そういうことがないように、大根がいいなら大根、白菜がいいなら白菜ばかりと、地域を指定して栽培すればどうかと思えます。

2つ、3つを一緒に取り組もうと思うと、財政的にできないので、1つを伸ばしていけれ

ばいいと思います。例えば、港であれば小松島、徳島の沖洲と両方をやろうと思ったら、財政が持たないので、港は小松島、木工であれば徳島市というようにポイントを絞って1つを伸ばすことです。1つの分野が飛び抜けていくと全体も栄えて行きます。

(委員) 人が職を求め、企業も人を求めているということで、これは企業誘致という大きな観点で言うと、行政の力なくしては難しいのではなかろうかと思います。企業誘致の現状について、徳島市では、どのような取組みを行っているかをお聞かせ願いたいと思います。

(事務局) 徳島市の企業誘致ということで、従来では製造業を主として、一般的にどこの市町村でも同じような形での企業誘致をしていました。徳島市の場合は、製造業に適したような広い土地の確保が、都市計画、市街化調整区域の関係もありまして、なかなか確保できないということから、応神町にハイテクランド徳島を造成しまして90%くらいは企業に入っていたいただいており、残りは2,000㎡余りの土地が2か所という状況でございます。製造業を誘致するということが非常に困難な時代になりまして、私どもとしましては、雇用効果の高いコールセンター、データセンターに力を入れてまして、県と一緒にやりながら、企業誘致を進めているというのが現状でございます。

本来、県と一緒に企業誘致をする場合は、雇用が多方面の市町村に影響をするということで、県にも一時的に一番力を入れていただいております。それに合わせて、市町村が県市協調という形でやっているというのが現状でございます。

(委員) そのような状況の中で、小松島市だけを捉えるというのはおかしいかもしれませんが、小松島市の企業でありながら、阿南市に工場を多く持たれています。阿南市と小松島市では、立地条件とか、水資源、港の問題、交通もそんなに遜色ないですが、阿南市にシフトしている状況もあります。

これからは、徳島市を中心とした若い労働者の確保という視点からしても、行政がもう少し連携を図って、企業誘致や企業の地元への定着を図っていく必要があるのではないかと思います。

(委員) これから空洞化が進むという恐れがありますので、企業誘致よりも先に、企業が出て行くのを防ぐことも一つの戦略です。そこで大切なのは、企業に対して、温かいホスピタリティや歓迎のスタンスを持つことも必要だと思います。企業には厳しく対処することになりがちですが、そういったことも提言をしたいと感じております。

また、工業団地といった受け皿だけではなく、市内中心部でどれだけインテリジェントビルが受け皿としてあるかどうか大きな要素であると思います。

進出する企業の真のニーズを掴んで、それに対応することが非常に重要ではないかと思います。

(委員) 圏域内への企業誘致という話になれば、100人、200人単位の企業をどんと連れて来るという意識で今まで動いてきていると思います。当然のように、みんなそれを期待していて、一社誘致できたら、何百人も雇用が生れるという形でやってきたのですが、現実の問題とし

て、徳島自体が優位性を保てるかということ、なかなか保てない部分もあるかと思います。

それで去年、神山町内で空き家の再生事業をやりまして、地域活性化センターから補助金をもらって、NPO法人グリーンバレーもお金を投入して、400万円くらいかけて長屋を改造しました。現在、その長屋は、東京に住むイギリス人のトム・ヴィンセントという人が借りてくれていて、その人の関係で、クリエイター達が入れ代わり、立ち代わりやって来て、そこで仕事をして、また帰っていくという場所になってきています。

そうした動きを見せていたところ、去年の9月末に東京のITベンチャーで情報管理会社ですけれども、新しい働き方を顧客に対して提案することを会社の方針の1つにしているから、1戸探してくれという話がきて、去年の10月に7LDKの古民家を借りて半年間試験運用をしました。その会社の開発部門には12、3人いますが、その人たちは、東京で通勤電車で揺られて、会社で十何時間働いて、また通勤電車で揺られるといった生活を続けていたら、なかなかクリエイティブでなくなると。そういう仕事を神山に持ってきて、そこで1つのプロジェクトとして、1カ月半くらいで仕上げたらその人たちは帰るけれども、また別のグループがやって来るというように運用していますと、また違う会社からサテライトオフィスを置きたいからという申し入れがありました。このように、複数の事例ができると、NHKなどがこれは現象になりつつあるということで、取材に来ています。

これは、小さな企業誘致というより人間を誘致するという考え方かもしれませんが、そのようなことを続けていくことで、その人たちが落とすお金はあまり大きくないかもしれないけれども、そういうクリエイティブな人が町に入って来ることで、地域住民とのいろいろな知恵の融合というのが必ず起こるわけで、現実にはいろいろなプロジェクトが動きつつあるというのが現状です。

ですから、昔のバブル期のようなイメージで、大きなものを大綱でばさっと掴むという考え方ではなく、小さなものを積み上げていくという考え方をしないと、今の時代は成り立ちにくいと思います。例えば、神山町内に10か所のサテライトオフィスができれば、町の様相というのは全く一変すると思います。徳島は広いわけですから、神山町だけではなくて、勝浦町が気に入る人もいるだろうし、佐那河内村が気に入る人もいるだろうし、もっと違う場所でも動かしていけばいいと思います。

特に、地デジの対応で徳島は、光ファイバー網でほとんど全世帯つながっているという利点があるので、その辺りもうまく活用し、いつまでも光ファイバー網でもトップランナーではいられない時代がすぐに来るわけですから、今のうちにこういう小さな芽というものを育てていく必要があるのではないかと思います。

(委員) 徳島は、下水道も遅れております。徳島県全体で13%くらいです。全国平均が70%くらいありますから、徳島県で全国平均の半分までになったら、新町川はいつでも泳げるような状態になります。やっぱり、きれいな、生物が多様な川にしていくというのは、本当に大事だと思います。私も昔はよく小松島に行って、小松島の高等学校のところでホテルがたくさんいましたが、今は見る影もないです。やはり、水のきれいな街を徳島県全体で目指していくことが必要だと思います。徳島市も「心おどる水都・とくしま」を将来像としていますから、新町川もきれいになってきました。

それと、よく感じているのは、各地域で交流が少ないということです。住民にしても、企

業にしても、もっと交流が進んでいけばかなり違うのではないかと思います。徳島と小松島、徳島と板野にしても、案外、知ってはいても交流が少ない。ですから、板野、藍住、石井、松茂、北島だとかは、川でつないでいろいろなことができるし、神山であれば、徳島・万代町にアートができていますので、アートでつなぐとか、小松島とであれば、海でつないでいく、上勝であれば森の健康診断ということで一緒にやっていますので、同じテーマで町をつないでいけます。

人と人の交流、民間と行政とのつながり、行政同士でも案外つながりが少ないように思いますので、行政同士でももっと交流が進んでいけば、違ってくるのではないかなと思います。やはり東部圏域でこういった交流ができてくれば、いろいろなことが解決するのではないかなと思います。

(委員) 共生ビジョンの案では16ページに環境の項目が挙がっています。この文章を読ませてもらって、まず感じましたのが、「(5) その他」のところで、「環境政策に対する関心が高まってきています」という表現ですけれども、私はもっと深刻な感じがいたします。地球温暖化については、「人類の生存基盤に関わる重大な問題である」というような表現をしていただけないかなと思います。

地球温暖化というのは、いろいろな報道とかで言われておりますけれども、異常気象であるとか、あるいは生態系への影響とか、人類への影響とか、砂漠化が進んでいるとか、海水面が上昇してきているとかいったようなことがいろいろ言われております。このビジョンの中で見てまいりますと、そういった環境保全の中でも地球温暖化対策としてCO<sub>2</sub>の排出を少なくしようというようなテーマですが、そのほかに地方では、ゴミ処理であるとか、産業廃棄物の処分、公害、大気汚染水質汚染といったものもあろうかと思いますので、もう少し幅広く、具体的な事業を採用いただけないかなと考えています。

具体的な取組事業の中で、ノーマーカーデーとかライトダウンとかが出ておりますけれども、かねてから県もこういった取組みがあったと思います。6年前に勤めていた企業でISO14001を立ち上げた際に参画しておりまして、このような項目も掲げましたが、チェックをしなければ、すぐにもとに戻ってしまいます。その時の反省から、十分チェックをする機能を付けて欲しいと思います。

当面、できれば公共団体からこういったものを採用するとか、あるいは環境学習の中では、小学校、中学校、高校で、学校版のISOを採用したりしているところも随分あり、上板町内でも小学校で1校だけ採用しておりますし、徳島市内ではかなりの学校が採用されていると思いますので、できれば全学校で学校版のISOを採用して欲しいなと思います。子どもたちとか、孫たちから環境について家庭とかで発言があれば、非常に効果的です。

それと「エコアクション21」というのは、多分ISO14001を簡略化したものと思いますが、地域の企業に対して、公共団体を通じて働きかけをしていくというようなことも必要であると思います。また、国から公共団体に対してグリーン購入の割合を増やさないという指示があったと思いますが、これらもこの中に含めれば効果的ではないのかなと思います。

(委員) グリーン購入を12市町村が管内の事業者に対して勧めることは、おもしろい着想かもしれませんが、学校版のISOはかなり進んでおるように聞いております。

また、「エコアクション 21」ですけれども、これは県の入札の際の評価点に加えられるようになり、その結果、全国でもトップクラスの伸び率となっております。そういったことで、本県はかなり環境についての関心は高まってきていると感じています。

「鳥獣害対策」は、生態系の乱れによって、シカやサルが人の住むエリアに降りて来る。動物の保護との関係で複雑な問題を抱えているなどという感じがします。

(委員) 佐那河内村の園瀬川の水が非常にきれいで、今日も、この会議に来る際に川辺に数十人がキャンプや水泳に来ている状態です。こういった水と親しめる環境は、非常に素晴らしい。これは、ひとえに先人たちが、佐那河内に下水環境を整備していただいたおかげであり、声を大にして言いたい、一つの自慢だと思っています。

それから、鳥獣害対策ですが、佐那河内村では小・中が一貫校として1か所に移りまして、旧の中学校が建物と体育館、運動場が残っております。私も旧の体育館を利用させていただいていますが、運動場や旧校舎の階段にサルの糞がいっぱいです。これはどうにかならないのかと常々思っております。山沿いの民家では、秋が来て柿を干し柿にすると人の口に入る前にサルが食べてしまうような状態で、非常に苦慮しています。他の町村ではどのようなことをされているのかとご意見を聞かせていただけるとありがたいです。

また、大川原高原は、近年、シカとかキツネが増えて野ウサギの数が減って来ました。生態系のバランスが数十年前から変わってきたということで、我々人間の力で何か対応できることはないのかと考えております。

最後に、数年前に神山町と佐那河内村を府能トンネルで結びました。それまでは、曲がりくねった道を何十分もかかって神山町に行っていましたけれども、今はあっという間に行き来ができて生活環境がすばらしくなりました。このほかにも、いろいろなところでトンネルは交通環境をよくする一つの方法ではないのかなと、このように考えております。今日、お集まりの方々にとともにご協力していただきたいと思うのが、徳島市と佐那河内村の間に大久保峠というのがございます。曲がりくねった道で、道幅も少しは改良しておりますけれども、あまりいい道とは言えません。ここで、神山町から佐那河内村に、あるいは木屋平、小松島に出て行くのに、曲がりくねった道を通らなければならない。これをトンネルで簡単に結べる方法があるのですが、未だに実現できません。特に、石井町とか吉野川市から小松島に行くのに佐那河内を通る人のためにも、交通の難所となっているところを早く整備していただければ、12市町村の人たちにもプラスになって、環境も良くなると考えております。

(委員) インフラの整備というのは、交流促進の上で非常に重要なファクターです。

(委員) 一般的に人材育成は、常にこのような格好で出てきますが、本当は非常に難しいと思います。具体的にどのような人材を養成するかということですが、圏域全体について共同事業を進める上で、必要なマネジメントを行っていく能力を持つ人材を養成していくという意味だろうと思いますけれども、このような人材の育成はなかなか大変なことだと思います。私の経験では、人材育成には、OJT(On the Job Training)が有効であり、それには、良き上司をモデルにする形や結果として成果を出していくような仕事のやり方を知る、学ぶとか、いろいろなやり方があるかと思いますが、人材の育成が大切であるということは、誰もが疑

いませんし、そのような人材をどのような形で養成していくかということが大変重要ではないかと思います。仕事で得た経験や先進事例等を実行し、それらの成果を検証するという形で、地味ですが、基本に忠実にやっていくのが重要なのではないかと思います。

合同研修会の開催ということが書かれておりますけれども、方向性としてはこれで良いと思います。ただ、大切なのは具体的な研修の中身、計画であろうかと思います。先ほど、環境の点でご発言がありましたように、プランしてドゥ、チェック、アクションするという地道ですが、着実にやっていくことが必要なのではないかと思います。5年間、このような形で常にPDCAサイクルを回すことによって、人材の育成がなされていけば、必要な人材が育つ芽が見つけられるのではないかと思います。それは共同の人材育成だけではなく、個々の市町村のレベルでも有能な人材が育成されていくのではないかと思います。最後になりますが、NPOの皆さんからも、学ぶことは随分多いのではないかと思います。

現状として、このようなことは行っていますか。

(事務局) 現在、徳島市では、人材育成の進め方ということで、人材育成基本方針というものを定めておまして、その中で一定の職員研修での対応を行っているところでございます。それぞれ階層別の研修、それに加えて専門的な研修といった組み立てで研修を行っているのですが、そういった研修だけではなくて、いわゆる人材を育成していくという中で、今の行政職員に求められているいろいろな要素があるだろうと思います。特に、現在、地方自治体というのは、財政状況が厳しい中で、行財政改革を進めているところがございます。その中で職員の意識改革をどんどん進めていくという必要がございます。一方、個々の職員の政策形成能力といったものを高めていくという大きな視点があると思います。

こうした視点に基づいて、研修計画を立てて、実施している状況でございまして、今回、12市町村との間で、特に本市でやっております意識改革講座に参加をいただく中で、合同研修というような形で進めていきたいと考えております。

(委員) 確か、学校の校長先生は民間からの登用があったと思いますが、民間から市の職員へというのは聞いたことがないですけれども、そういうふうな民間意識を持っていただくというのも大事なのかなと思います。

(委員) 先ほどの人材育成ですけれども、私は去年、熊本県に行く機会がありまして、その時に訪れたNPOでは、県職員が1年間出向されているというプログラムがありました。そのNPOに出向されている方は、本当にアイデア、発想から、企画、立案、実行まで自分一人でされているということで、NPOの方が非常に助かっていたという状況を見て、本当にうらやましいなと思いました。

NPOは慢性的に人手不足で、行政の職員が助けてくれるというのはありがたい、うらやましいということもありますし、NPOに出向された職員が、実際に現場で困っている状況というのを目の当たりにして、人手不足がこんなに大変な状況なんだということをしっかり感じていただくということと、行政の中であれば、年齢に応じてそれなりの仕事しかできないと思いますが、小さな作業所や事務所に行くと、本当に何から何まで自分でしなければいけないということがすごくいい経験になっていると仰っていました。

確かに、県職員ということでお金の融通等もあったのかもしれないですが、それだけ人材育成にお金をかけているという印象を抱きました。市町村のレベルで考えると難しいところがあるかもしれませんが、人材育成というのは、単純に考えて、人と人の出会いが意識を変えようと思っています。政策立案能力までは、出会いでは育むことはできないと思いますが、意識の改革は、現場で起こっている問題に気付くということから始まると思っています。ですから、環境、福祉、教育というそれぞれの分野で、自分が研修に行く、あるいは規模が違う市町村同士でどういう問題を抱えていて、どういう対策を講じているのかで交流することで、さまざまな問題の解決につながって来るのではないのかなと思っています。

(委員) 政策立案能力は非常に重要なことで、みんなが情報・ノウハウを持ち寄って、12市町村で最高水準まで持っていくことが大切です。合わせて、情報リテラシーも大切です。最新のICT技術を全職員が駆使することで、レベルアップする。そのために、人材育成によってレベルアップを図るといような、いろいろな切り口があると思います。徳島市におかれては、職員提案制度での成功事例があれば、12市町村に情報を提供することで、メリットを共有するという懐の深さもあればいいのではないかと感じています。財政も人員も厳しい中で、非常に難しい相談かも知れませんが、中央との人事交流だけではなくて、横の人事交流による刺激、そのようなことも望ましいのではないかという感じがいたしております。

それから、12市町村のそれぞれの強みを意識した役割分担ですが、医療については何処、産業については何処という感じで、役割分担することによって意識が徹底して、連帯感が強まってくるのではないかと思います。

(委員) やはり、だんだんと人口も減少し、それにつれて職員の数も同じようにいろいろな部分で減ってきている。私が感じただけかもしれませんが、なんとなく住民とのかい離が進んでいるのではないかと思います。それは、職員が減ったから住民の中に出て行けないのか、それとも人材育成に問題があるのか、どこに原因があるのかというのを考えていく必要があるのではないかと思います。以前より外に出て行くことも少なく、一時期はあった他の市町村との交流も財政的な理由でなくなってしまって、他の市町村のお話なども聞く機会もなく、進んでいるようなところがあると思います。先ほども仰っていましたが、交流の中で大きなものを得ることができ、足し算が掛け算になる部分も非常に多いと思いますので、そういった交流もこのような機会に発展させていければよいのではないかと思います。

(委員) 交流というのには3つの効用があると聞いております。

1つ目は、カルチャーショックということで、交流することによって、カルチャーショックを受けて住民意識が変化し、住民力がパワーアップする。

2つ目が、ヒューマンネットワークの構築ということで、個々人の人間関係の広がりによって、新しい発想が出てくる。

3つ目が、ビジネスチャンスの発掘ということで、それがビジネスにつながっていくということです。交流は、非常に重要な視点だと思います。

(委員) 人材の育成には、専門的知識も大事でしょうけれども、やはり人と人との交流、という



か職場における信頼感の醸成が一番ではないかと思います。行政の職員にしても、企業の中においても、やはりトップと従業員との信頼関係がうまく保たれていれば、みんな自然と働くのではないかと思います。その例が、女子サッカーの「なでしこジャパン」の監督と選手とがそれではないかと思います。以前にも東京オリンピックの女子バレーの大松監督と「なでしこジャパン」の佐々木監督との違いを対比していたのを見ましたが、大松監督はものすごく厳しくて、どちらにするかは、上に立つ人の指導の方針だと思いますが、私もこれまでの経験からすると、あまり厳しくすると子どもは反抗します。イソップ物語の「太陽と北風」の太陽のようにするのが効果的だと、今の年齢になって思いましたけれども。

やはり、上司や同僚との信頼関係がうまくできていたら、人材の育成というのもうまくいくのではないかと思います。

(委員) 人材育成と言えば、どの行政を見ても、やはり夢がありません。夢があつて、それに情熱とか愛情があれば十分にやっていますが、やはり、徳島市で言うと市長、副市長、そういう人に夢が要る。それが、どうしても欠けてくる。もう少し夢があつて、情熱とか愛情があれば、街は必ず変わってきます。そうすれば、人材育成をしなくても十分にやっています。

今の市の職員は、政策立案能力は十分に持っています。立案能力があつても、それが十分に発揮できない状態です。上に行くほど夢と責任を持たないといけません。そこが欠けているのが弱いところではないのかと思います。やはり、夢があれば他の市町村との交流も自然と進んでいくのではないかと思います。徳島市役所も政策立案能力なんかも素晴らしい人がたくさんいますよ。それが発揮できないだけです。

(委員) 夢を持つということは、非常に重要です。夢とビジョンとはどこが違うのかと言うと、夢は実現するのがなかなかですが、ビジョンは梯子があるから一歩、一歩進んで行ける。

今回は、ビジョンということですから、夢を持つけれども、ビジョンで一歩、一歩進んで行けるという自信を持った計画にしていきたいと思います。

(委員) これを進める中で行政同士の関係の中でいけば、非常に現実的な、今ある問題をどう解決するかということに走り気味になると思います。そのようなものより、バランスの問題があると思いますが、夢も実現できるようなものもビジョンの中に一つや二つは含まれていなかったら、例えば福祉の問題が全てに共通するから、全て福祉でやって行かないかという話になったら、将来への投資という面から考えると、少し寂しい気がするので、多少配慮した形でビジョン作りができればいいと思います。

(委員) 少子高齢化の時代ですので、我々が担当する医療の分野でもがんの拠点病院の認定を取るなど、高齢者に対する対策をかなり立ててきたつもりです。また、高齢者になりますと膝や大腿骨とかの疾患が増えてきますので、そのようなところをやってきたわけですが、徳島の医療というのは、医師が全国でもトップクラスで多いですが偏在しており、東部地区には多く、南部や西部には少ないという課題があります。いずれにしても医師の数も病院の数も多いことは、住民にとっては医療がかなり恵まれている県であるということです。四国で最も古い徳島大学医学部があることで、研究面でかなり高度な医療がなされていると考え

ています。

これから、どのように貢献できるかについては、我々の病院は急性期という、病気になってすぐから1カ月くらいまでの期間の治療を、救急医療と分けてやっていますが、これから高齢者が増えていくと慢性期の医療が求められていくと思います。これからは、むしろ急性期を過ぎた後の、慢性期あるいは、在宅に至るいろいろなケアをやっていかなければ、難しいのではないかと考えております。

「病診連携」を進めて、いろいろなケアをすることができる施設や家庭の環境であるとか、高齢者を支えられるようなコミュニティを作るとかいうようなことに、これから力点を置かなければいけないのではないかと考えています。

(委員) 医師の人口比では全国1、2位をずっとキープしているということですから、医療環境の面では他の地域、圏域よりも優れているということをアピールしやすいと考えております。

(委員) 市町村職員の人材研修については、NPOということでは、徳島市の方が3年くらい前に新任研修で半日だけ来ていただきましたが、私たちの思いを伝えられてすごくよかったなということと、そのように直接現場に足を運んで来てくださっている方であれば、私たちの頑張っていることや辛いことや悩み事などが言えるので、うまくコミュニケーションをとれています。現場に来なくて、文書だけをポンと出したり、言葉だけでこうだと言われても、なかなか理解が難しいところです。

特に、新任の方は、すごく新鮮味があって、私たちの思いと、これからの行政マンとして気をつけてほしいところと、とにかく現場に足を運んでほしいという話などお願いしたら、担当課でなくても、深夜まで仕事をしていると「すきっぷ」の前を通る時に声を掛けてくれたりすることがあります。新任研修をしてくださったのは、非常にありがたいと思いました。

また、子育てに関しては、行政の子育ての担当課の方が、最低限の意識、お母さんを傷つけない発言、対応を横の連携で学んでほしいと思います。いろいろな市町村に電話しますが、不快な対応をされることがあります。市町村同士がコミュニケーションによって本当に素晴らしいものは取り込むということをしないと、お母さんたち、お父さんたちが行政の現場にお願いしてもそこで潰されるケースというのは今までもあったし、今もあります。

行政は、住民が夢を語れるような場所にならないといけないと思います。

(委員) 人と人との交流や横のつながりや情報、それが大事なのは分かりますが、具体的にどうしていくのかということが分からないのです。この間も、ゆめタウンが町に対して一画を提供してくれるので、関係者とその話をしていましたが、そこでイベントだとか、町の観光物産品を展示したり、そこで藍染めをしたりするという話になっていっています。徳島市の木工会館でも藍染めなどとコラボレーションして、遊山箱がすごく売れています。ですから、藍住町の物産だけではなくて、木工なども横のつながりでやっていけるようにすれば、もっと大きくなっていけると考えています。

(委員) 横のつながりのコーディネーター役が、各分野で欲しいなと思います。

(委員) 観光振興の分野では、行政の担当者が比較的早く異動してしまい、ネットワークだとか横のつながりが、あっと言う間に崩れてしまいます。次の担当者の方が、前任者と同じレベルのネットワークを組むまでに、相当な時間がかかってしまい、民間にとっては、せっかく積み上げてきた議論や取組が次につながりにくくなります。少なくとも専門分野のような部署の方は、3年と言わずもう少し長期で、うまく引き継げるような体制を考えたほうがいいのではないかとこのことを日ごろ感じています。

もう一点、夢という話もたくさん出ましたが、やはり5年先、10年先の中長期的な視点に立ってもっと想像力を働かせ、将来のあるべき姿に向って、今どうすべきかということを考えなければならぬと思います。お金に縛られて、目先を優先するとなかなかうまく回っていかぬと思います。将来について、もっと想像力を持って考えることができるような体制を是非つくっていただきたいと思います。

(委員) 非常に難しいことですが、現状分析は厳しく、そして将来は夢が持てるものをつくるスタンスが要るかなという感じです。

また、公務員の人事のローテーションは難しい問題だなと思います。例えば、2、3年ごとにどんどん替わっていくとなったら、また一から積み上げていかなければならないという問題があります。

(委員) 個人的には、できれば観光というか、徳島市民も神山に入ってきて、場と一緒に育てていって、活用できるようなプログラムを作りたいなという気はしています。

具体的に言えば、寄井座という劇場があって、昭和4年に造られた劇場ですけども、芝居などがいろいろと行われていましたが、昭和35年くらいから縫製工場に変わって、何十年間か縫製工場でしたが、それも撤退してしまっ、今は劇場だけが残っているという場所があります。

例えば、徳島市内で芝居をやっている人たちがたくさんいると思うので、そういった人が神山にやっ来て、その劇場でいろいろなことをやり始めるとか、余所からも、その人たちが学ぶための先生役になるような人や演出家と呼ぶとかいう形で、徳島市内との交流ができればいいなと思っています。

(委員) 地域が活性化するためには、モノは外に付加価値をつけて輸出、もしくは移出する、人は内へとどんどん呼ぶことが必須ですが、徳島の場合は、旅行業者でもアウトバウンドばかりで、インバウンドは阿波おどりだとか一部の時期しかないです。

もっと徳島を知ってもらい、徳島に足を運んでもらい、徳島で泊まってもらって、観光消費をしてもらうためには、インバウンドの工夫、地域戦略が必要だと思います。

(委員) 今の地域戦略という内容であれば、着地型観光をもっと推進すべきです。ハワイや沖縄などでは、泊まったホテルが違っても前日までに予約すれば、翌日各ホテルをバスが回ってきて、そのバスがオプションで地元特有の観光地などに連れて行ってくれます。

徳島でも、あるホテルがお遍路さんの体験ツアーを独自でやられている場合はありますが、それを東部地域で共同してやれば、もっと効率的になるのではないのでしょうか。前日までに

お遍路に参加したいということを各ホテル・旅館で受け付け、翌日その宿泊施設を回って、札所などを巡り、それぞれのホテルに帰ってくる。

さらに、もっと言えば、このような体験型プログラムは各市町村で持っていると思うので、そのネットワークをつくり、どこで泊まっても、ワンストップの組織に連絡さえすれば、予約も取れ、かつ情報も得られるというシステムを将来的につくり上げればいいと思います。採算を考えると、相当数のお客さんが来ないとできないことなのかなとは思いますが、今からやり始めてもいいのではないかと思います。

(委員) 12 市町村が結束すれば、かなり面白いことができるのではないかと思います。また、公共交通が未整備なのを逆手に取って、その不便さをカバーするためにレンタサイクルをふんだんに用意して、自転車で回ってもらうのも面白いかなと思います。

(委員) 観光で思ったのが、阿波おどり一つ取っても、徳島市は 12 日から 15 日、勝浦とか上勝とか各地区で、それぞれ開催日を少しずらしてやっているというような情報が全く表に出てこないです。ですから、各地域がこういう形でやっているよということをもっとうまく PR していくということも非常に大切だと思います。みんなで一緒に PR 資料を作るような場が必要なのではないかと思います。相互の情報を積み上げて、この部分を強調して外に出していこうという体制作りをこれからきっちりやっていくと良いと思います。

外から見ると徳島は一つなのですから、各地域が独自に発信しても、外からは一つに見られてしまうのなら、そういった取り組みもテーブルを囲んで具体的にやっていく場づくりが必要ではないかと思っています。

(委員) 阿波おどりが 4 日間だというのはおかしいと思いますね。徳島市は 4 日間であって、鳴門市から始まって池田までいくと 10 日間くらいありますよ。そういった地域の情報をひとまとめにして発信すれば、都合で徳島市の阿波おどりに行けなくても、別の場所に行けるといったように、もっと幅が広がってくるように感じます。

(委員) 「すきっぷ」がオープンしてこの 9 月で丸 8 年を迎えますが、オープンした当初から、利用者のお母さんたち、お父さんたちも阿波おどりを楽しみたい、踊り子さんたちが子育てをするようになって、それをお手伝いするために、阿波おどり期間中はナイトオープンしています。スタッフが足りなくてすごくきついですが、それでもやってしまいます。せっかく、中心商店街のための「すきっぷ」であるのに、きれいなトイレを提供できたらいいとか、おむつ交換や授乳ができるようにと、スタッフがいる限りは絶対に受け入れます。「すきっぷ」の使命として開けています。

また、阿波おどりの情報誌の 8 冊目を出していて、6 冊までは白黒で 200 部発行していましたが、去年からカラーで 10,000 部、今年は 15,000 部発行し、市の観光課が駅前の案内テント、ホテルだとか観光施設に置いてもらっています。それで、この冊子の何が面白いかというと、阿波おどりを中心とした市内のトイレマップなのです。これが今までになかったということで、昨年度は高齢者、障害者の方に面白いと言っていました。私たちは、広報が下手で、知らない人がたくさんいますが、地道にこれを出しています。

昨年、この中で、阿波おどり期間中の昼間はどうかというモデルケースを載せてみました。食事は、徳島で人気のラーメン屋さんやバイキング屋さんを入れたら、阿波おどりが終わってから電話がかかってきまして、そこのラーメン屋の場合は期間中に子育て中の方がたくさん来られたという、今までにない現象が起きたので、店内に子育ての情報コーナーを設けるから、情報を持ってきてくれないかということで、毎月パンフレットを置きに行っています。もう一つのバイキング屋さんは、おしゃれなテーブルしか置いてなかったのですが、子どものプレイコーナーを作って、子ども連れの方も遊びながら過ごせるようにしました。それで、2号店にもそうしたものを部屋として設置したという現象が起きた時に、こういう形になるとおもしろいなと感じました。

たくさん市の町村の中で、子ども連れで来た時に、藍住で藍染をして、北島に行くということを、パンフレットを子育て世代に限ってでも作ると、そのコースに人は動くのではないかなと思います。全部の市町村を回れるようなコースを設定して、人を動かす、お金を落としてもらうような仕組みを仕掛けていけないかなと思いました。

(委員) 田舎に居ると産業と観光というとちょっとピンとこないところもありますが、良いところは物まねでもいいのかなということで協議させていただきます。

例えば、高知の日曜市ですが、徳島県でも小規模なものがありますけれども、観光とつながったような日曜市がないのがちょっと寂しいと思っております。日曜市のような形で、例えば藍住のエンジン、松茂のレンコン、神山のスタチ、佐那河内のシイタケなどを持ち寄り、買い物兼ねて人を集め、それを観光に結びつけて眉山に登ってもらうとか、あるいは新町川クルーズに乗ってもらうとか、開催地も月によって変える形でやっていけば、この12市町村が何かの形で潤ってくるのではないかなと思います。

物まねがすべていいというわけではないですが、高知の日曜市が非常に繁盛しているの、東部地域も日曜市によって産業面、観光面が活性化するのではという感じがしております。

(委員) 情報発信は、相当できていると思います。徳島にたくさんの方が来ていて、徳島に来た人が、帰って「徳島はよかったぞ」と言ってくれないだけのことです。阿波おどりに来た130万人が帰って、5人に言ったらものすごい数になります。「徳島に行ってもおもしろくないぞ。」と言うものだから人が増えないだけです。ですから、どれだけ情報発信しても、来てみて面白くなかったら、返って逆効果ですね。そういう基本的なものできていないのだろうと思います。

街が生き生きしている、人が生き生きしているとかであれば、人はひとりでのやって来ます。基本が足りない。徳島に来て、空港を降りたら、道路は木がきれいに手入れされていて市民も街に愛情があるなというようなことです。現状では、国道、県道や市道でも街路樹が乱れています。神山に行く途中には、きれいなしだれ桜がありますが、そういうことがどの街にもできて、たばこの吸殻も落ちていない、きれいな街だと、徳島きれいだぞということで一人が言うと、来る人がものすごく増えると思います。それも、行政がするのではなくて、住民がしていくと、自分たちの街のことは自分たちでしていくんだという住民の自立がこれから問われるのであって、それが出来れば、ひとりでの徳島に人は来ます。ロコミの強さに対して、観光行政が一つも根についてないんです。

まずは、市民が楽しむようにすれば、観光は放っておいても流行ってきます。

(委員)「汗が客を呼び、噂が客を呼ぶ。最後に客が客を呼ぶ。」という言葉がありますけれども、本当に口コミというのは大切だということですね。地域の皆さんが自立して、我々の地域は我々が盛りたてるという意識が、みんなに浸透すればいいのですが。

(委員) 何年か前に、徳島空港から徳島市内までに来る途中の街路樹、その中に雑草が生えていて、汚くて幻滅したということを知りました。やはり、見た目の環境というものは大事ではないのかなと思います。

(委員) 情報システムの関係で一点申し上げておきたいのですが、情報システムは5年で一回りするような世界です。5年後や10年後は、何が起きているか分からない。クラウドがますます進んでいるかも分からないという状況が十分考えられるので、前回も申しましたが、このテーマに参加していない市町村は、研究するという意味で、正式な参加ではなく、オブザーバー的に参加できないのかと思います。現在、参加されていない団体は、それぞれの事情や理由があって参加を控えたのだと思われませんが、今後5年なり10年でこの世界は非常に展開していくので、流れを見る意味でもオブザーバー的に参加できればと考えております。

もう一点は、前回、徳島はICTを活用した情報発信が下手だというご発言がありました。これは、私自身も大変重く受け止めています。その理由などをいろいろ検討しなくてはなりませんが、情報発信が下手であり、その理由が県民ポータルがないということに関連するのであれば、私に関係する部分でもあります。うまくいっている事例などがありましたら教えていただけたらありがたいかと思えます。

温暖化に関しては、大切ですが難しい課題です。と言いますのは、詰まるところ、自動車の運転やテレビを見るのを減らしたり、空調の温度を調整するなど、自分自身の日常生活を見直して、実行しないといけない部分もあるからです。対策についてはPDCAサイクルで回していただいて、地道に展開していただき、それがCO<sup>2</sup>の排出削減に影響するのかどうかということを住民の皆さんに提起できればいいのかなと思います。

### (3) その他

(事務局) 事務局から、「共生ビジョン最終案」と「会議録の確認」について報告

(委員) 皆さま、長時間にわたる議論、お疲れさまでした。私は副会長に就かせていただきまして、微々たる力ではありましたが、個人としては皆さまの多種多様なご意見を聞かせていただいて、一徳島県民として夢を持ったビジョン、梯子の方も考えつつ進めていけるよう、お会いしました皆さまとこれからもつながりを保ち続けていければと思いますので、今後ともよろしく願いいたします。

(委員) 委員の皆さま方におかれましては、積極的なご意見をいただきましてありがとうございました。

私も感じましたけれども、夢のあるビジョン、これは非常に重要ではなかろうかと思えます。それとともに、このビジョンは作成して、お飾り的なものではなく、作成がスタートで、

それを実践のためのバイブルとして、それを常に意識し、常に活用して、地域の連携と発展のために、常に省みられるものでなければならないのではないかと思います。そのためにも、たとえ小さくてもどういうメリットがあり、どういう効果があるかということに参加している市町村が実感できるような成果を共有したいなという感じがいたしております。

そのためには、それぞれの市町村が何らかの役割を持って主体的に動く必要があるのではないかと思います。それと、競争と協調という言葉がございますけれども、それぞれの市町村がある意味では競争し合うとともに、ある面では協調して、力を合わせてみんなで情報交換をし合って、それぞれの地域がより住みやすい、生き生きとした地域づくりを推進できればと思います。

そして、住民力、地域を愛する住民のパワー、これを最大限に引き出して、いい地域づくりをするためのビジョンができればありがたいかなと思っております。

委員の皆さま方には、本当にありがとうございました。

(事務局) 徳島市第一副市長の本田でございます。会長、副会長をはじめ、委員の皆さまにおかれましては、公私とも大変お忙しい中、徳島東部圏域の発展に向けた貴重なご意見・ご提言をいただきまして、心からお礼申し上げます。

徳島東部地域において、今後、「定住」と「自立」を可能としていくためには、暮らしとサービスの根幹である地域経済・地域産業の活性化が何よりも重要であり、この分野に優先して取り組んでいく必要があると考えております。

また、そのベースとなるものとして、「地域づくりは人づくりから」の言葉があるように、圏域のさまざまな分野でリーダーとなる人材の養成も大きな課題であります。

こうしたことから、共生ビジョンでは、各種の行政サービスの向上に関する連携事業はもとより、圏域全体の「観光・産業振興」と「人材育成」を重点分野として位置づけ、取り組んでいくこととしております。

懇談会といたしましては、来年度以降につきましても、共生ビジョンに関する専門的なご意見をいただく必要があると考えておりますことから、委員の皆さまには、引き続きご協力をお願い申し上げます。

共生ビジョンで連携する内容につきましては、まだまだ手探りの状況もございますが、これまでに委員の皆さまからいただきました貴重なご意見を十分に踏まえ、より実行性のあるものとなるよう取り組んでいくことを考えております。

簡単ではございますけれども、私からのお礼のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

### 3 閉会

以上